

そこにいる子が子どもであるということ④

## 「子ども観」と「子どもの見え方」

浜口順子

(大学教員)

### 十八歳の「子ども観」

私は大学一、二年生に保育や幼児教育について授業をする際、(この連載のタイトルでもあるが)子どもが当たり前そこに「いる」と感じるだけでなく、目の前の子どもがしっかりと存在感を持ってそこに「ある」と感じられる人になってほしいという願いを持っている。そのため、「子ども観」、すなわち「子ども」というものについて抱くイメージや価値観について考えることを授業では大切に行っている。

知らず知らずのうちに、人は子どものことを、好きだとか苦手だとか、素直だとか未熟だとか、ある偏った印象を持って眺めているものだ。子どもを「ありのままに」見るというのは、たやすいことではない。どうしてもその人の個人的な「子ども観」や、その時代その文化が背負っている社会的な「子ども観」というメガネを通して子どもを見ているのである。しかし、自分の持っている「子ども観」というものを反省し、「私はこういうふうに子どもを

捉えてしまいがちだ」ということを認識することで、子どもの見え方は相当変わる。

まだ二十歳にならない若い人にも、すでにかなり頑固な子ども観は備わっている。子ども観だけでなく、彼らはいろいろな社会的通念に侵食されながら成長し、さして疑問を持たずに暮らしている（人は皆そんなものだろう）。ずいぶん前のことだが、授業で紹介したテキストを持って私の元に来た学生が「この本には間違ったことも書いてあるのですか？」と質問してきた。私は内心とても驚き、これは大変なことだと思った。教科書の知識を丸暗記させてきた受験教育のせいだろうか。「教育」という概念についてもしかりで、知識を与えること、学校で勉強することが教育だと思い込んでいる人が非常に多い（これは若い人に限らないが）。幼稚園での観察記録に、外面的な事柄ばかりを書き連ねる学生が必ず一定の割合でいる。「自分の感じたことも書いていいのですよ」と話すと、「主観的なことは書いてはいけないと思っていた」と答える。こういうやりとりは毎年のようにある。そのたびに、客観主義らしきものへの警鐘はそれとなく鳴らす必要があると考えている。

ところが、かく言う私もその昔、人間の内面性を無視した、似非行動主義者<sup>えせ</sup>だった。高校時代、当時心理学界を席卷していた行動主義の考え方をどこかで聞きかじっていたのだらう、「人は刺激と反射の繰り返しで行動を起こすのだから、その連鎖を綿密に逆に手繰り寄せればどんな犯人探しも解決できるはず。だから推理小説は簡単に書ける」と思っていた（そんなつまらないもの、誰が読むだろう?）。その後、大学の児童学科というところで学ぶうちに、子ども観がガラガラと音を立てて変わるのを自覚した。中でも決定的だったのは、三年生から特別支援学校に通い、障害のある子どもと一緒に遊んだり教育スタッフと語り合ったりし

た経験だった。現在の私の子ども観の基盤はその時代に形成され、それ以来あまり変わっていないような気がする。障害の有無にかかわらずどんな子どもに会っても、ある共通の地平から接することができるようになった。しかしそれは「どの子を見ても」というレベルで話ができるものであるから、現職保育者の、それぞれの子どもへの個性を尊重し成長を支えていく専門性とは少し次元が違う話なのだと思う。

### 「子ども観」を超えた「子どもの見え方」

私の「子ども観」をめぐる授業の試みの一端は、本稿でこれまでも紹介してきた。赤ちゃんの写真を見せてそこから見て取れる人間性について考えたり（春号）、「子ども好き」とはどういうことか問うてみたり（夏号）、子どもの頃感覚を呼び覚ますために思い切り体を動かしてみたり（秋号）……。他にも、特別支援学校の子どもと遊ぶ体験実習の場を提供したり、よく知られている社会的歴史的な子ども論について言及したりもした。原ひろ子の『子どもの文化人類学』（晶文社 一九七九年）や、Ph.アリエスの『〈子供〉の誕生』（みすず書房 一九八〇年）、本田和子の『それでも子どもは減っていく』（ちくま新書 二〇〇九年）などの文献は頻繁に使ってきた。また本誌のアーカイブズから、戦前の記事をダウンロード、プリントアウトして読み合ったこともあるが、学生たちは旧字体を敬遠するどころか、意外に面白がる者が多かったのは意外でもあった。

学生時代のうちに子ども観という問題に一度は真面目に取り組むことが、大人になる上で大事だと考えてはいるものの、それだけで事足りりとは思っていない。人生の途上でいろいろ

ろな体験を積む中で、子どもの見え方は変わってくる。その行方は追えない。祖父母になつてみると「わが子より孫のほうがかわいく感じる」とはよく聞く言辭だが、なぜそうなるのだろうか。「責任がないから」ともいわれるが、それだけだろうか。

近頃私も、外で小さい子どもと出会うと、いとおしいというか、かわいらしく感じて仕方がない。もちろん以前からかわいいと思つてはいたが、その感じ方が著しくなつてきたというか、われながら不思議にもなる。乳幼児はもちろん、生意氣盛りの中学生も、時には二十〜三十代ぐらいのイイ大人を見ても、けなげに一生懸命生きている印象を受けると、カワイイなあ、人生まだ長いんだから頑張れー、というような気持ちになつてしまう。一言で言えば「年をとつた」ということなのだろうが、還暦近くなり、未来というものを貴重な残り時間として感じ始めている。子育てに忙しかった頃は、子どもの横に立ち、先の見えない未来に向かつて一緒に同じ方向を見て日々暮らしていた。それが今は、子ども（わが子だけでなく）のちよつと先を歩きながらも、振り返り振り返りしては自然と速度を緩め、時には立ち止まつて子どもを見ているような自分がある。

私の「子ども観」自体は学生時代からさして変わつてきていないと思うのだが、年をとりながら「子どもの見え方」のほうは変化してきている。体力が落ちて子どもを追いかけることができなくなり、行動の機敏さも衰えてきた。思えば、人類史上に出現した無数の大人たちがいて、そのほとんどが経験した人生の長さよりも私はもう長生きしてしまっているのだ（わが国の平均寿命にはまだ遠く及ばないもの）と思うにつけ、人間に許されている生物学的時間のスパンは「このぐらいか」と実感し、凡人のキャパシティ（大人性の水準）とい

うものにも思い至る。

とすると……私がこれまで出会い、感心したり、驚かされたり、励まされたりしてきた子どもたちの有能さ、面白さ、温かさなどは、人間の徳 (virtue) としてなんとすごいことだったのか。人生のあんなに早いうちから私の目の前で発揮してくれていた豊かな人間性に対して、ずいぶんと浅い配慮しかして来なかった、見過ごしが多かったと、深く悔いる気持ちになる。「子どもの力を信頼すること」や「子どもの自発性を尊重すること」の重要性は知ってはいたが、その力の底知れなさや、子どもの自発性が人間として十全なものであって、大人のそれよりも根源的な意味があると本当に理解していたのかどうか。子どもをちゃんと信頼できていたのかどうか。

朝日新聞の「折々のことば」欄からヒントをもらおう。鷺田清一が「毎日のように仕事に家を持ち帰る女性記者が娘を寝かしつけたあとパソコンに向かうのを、当の娘は知っていたらしく、添い寝の最中にこう声をかけられた」という、「二歳の女の子」のこんな一言を拾っている。(朝日新聞二〇一六年七月一日朝刊)



ママ、起きて仕事していいよ

この女の子のお母さんはきつと自分が一方的に世話をしているつもりだっただろう。しかし子どもは大切な人の生活（の表現）を確かに受けとめる力を持った人間としてそこに「ある」。子どもは大人をよく見ているし、大切な人に共感する力を存分に持っているのだ。ただし、「それなら、もう仕事するね」と毎晩寝かしつけを気楽に切り上げたらどうだろう。子どもの共感性、人間性を、大人が見越してしまうとまた間違いは起こる。この「ただし書き」は心に留め置きながらという条件付きだが、大人は子どもの胸を借りて生きているところもあるという一種の開き直りが保育を豊かにするものなのではないか。

でも、こんな複雑なこと、授業で正確に伝えられる自信はない。

—終わり—

